

■ 創刊特集 研究大学のゆくえ

国際卓越研究大学とは何か

——10兆円ファンドが描く「世界最高水準」と、その代償

世界と伍する研究大学を、国費でつくる。壮大な構想の骨格と出自を押さえ、推進と懸念の両面から、そして学術・教育・運営・学生・社会のそれぞれの立場から読み解く。創刊号の主題である。

■ 要旨

国際卓越研究大学は、10兆円規模の大学ファンドの運用益で、ごく少数の大学を最長25年にわたり支える制度である。ねらいは、相対的に低下したとされる日本の研究力を、長期安定した財源によって「世界最高水準」へ押し上げること。理念は明快だが、財務構造・ガバナンス・「測れる成果」への傾斜をめぐって、賛否は鋭く分かれる。本号は制度の骨格と経緯を確かめたうえで、**推進と懸念の両面**から、そして**五つの立場**から、その光と影を読み解く。

■ 制度の骨格

国際卓越研究大学とは、国が創設した10兆円規模の「大学ファンド」の運用益をもとに、文部科学大臣が認定したごく少数の大学を、長期にわたり支える制度である。ファンドは科学技術振興機構（JST）が運用し、**年4%超・年間3,000億円規模**の運用益を目標に据える。

支援は単発の補助金ではない。体制強化計画に沿って、第I期（10年）・第II期（8年）・第III期（7年）の**最長25年**という異例の長期にわたる。認定校は無制限に増やさず「数校程度」に限られ、ファンドの運用状況を見ながら段階的に選ばれる。

■ 何を指すのか

掲げる目標は「世界から先導的モデルとみなされる世界最高水準の研究大学」の実現である。世界トップ級の研究者が集い、若手を育て、多様性と包摂性のある環境で国内外の頭脳を惹きつけ、社会と対話しながらイノベーション・エコシステムの中核を担う——制度が描く理想像は、そう要約できる。

選定は過去の実績だけでは測らない。文科省のアドバイザリーボードが、①卓越した研究力、②実効性ある事業・財務戦略、③自律と責任のあるガバナンス、そして何より「**変革**」への意思（ビジ

ョン）とコミットメントを見る。重心は「これからどう変わるか」に置かれている。

■ 本号の見取り図

2面で構想の出自とこれまでの経緯を、3面で推進の論理と懸念を対置する。4面では、学術・教育・大学運営・学生・社会という**五つの立場**からこの制度が何をもたらすのかを読み解き、今後の展望を示す。

■ 国際卓越研究大学制度の骨格

項目	内容
ファンド規模	10兆円規模（政府出資約1.1兆円に、財政投融資による借入が加わる構成。大半が返済義務のある資金とされる）
運用・目標	科学技術振興機構（JST）が運用。年4%超・年間3,000億円規模の運用益が目標
支援期間	最長25年（第I期10年＋第II期8年＋第III期7年）。数年ごとのマイルストーン評価を伴う
認定数	「数校程度」に限定。運用状況を勘案し段階的に認定
選定の基準	①研究力 ②事業・財務戦略 ③自律と責任のあるガバナンス（＋「変革」への意思）

出典：文部科学省・内閣府（総合科学技術・イノベーション会議）「国際卓越研究大学制度の概要」等の公表資料より作成。数値は本紙発行時点の公表値。

■ コラム

査読は、意外に新しい

論文を専門家が事前に審査する「査読（ピアレビュー）」。科学の当たり前に見えるこの仕組みが多くの学術誌で広く定着したのは、20世紀の半ばのことだった。それ以前は、編集者の判断で載ることも珍しくない。科学の作法もまた、歴史の中で形づくられてきたのである。

SEIKO INSTITUTE
世界大学 最新動向

【宇宙】星がブラックホールに崩壊する瞬間を、最も鮮明に捉えた（コロンビア大学）

過去にNASAの望遠鏡が記録していた「正体不明の信号」を解析すると、星が崩れてブラックホールが生まれる過程だった（2026年）。探究のタネ：見過ごされた古いデータに、新発見が眠っていることがある。（出典：コロンビア大学）

構想の出自と、これまでの経緯

—— なぜ、いま「選択と集中」なのか

危機感という出発点

制度の背景にあるのは、「日本の研究力は世界と比べて相対的に低下している」という危機感である。国際的に注目される論文（トップ被引用論文）のシェアで、日本の位置は長期的に後退してきた。他方、欧米の有力大学は数兆円規模の基金（エンダウメント）の運用益で研究を支え、財政基盤の桁が違う。この差を、国費でつくる巨大ファンドで一気に埋めよう——それが構想の出発点だった。

二〇年をかけた地ならし

もっとも、「少数の拠点に集中投資する」という発想は、突然生まれたものではない。今世紀の初めから、卓越拠点を選んで重点支援する政策（21世紀COE、グローバルCOE、スーパーグローバル大学など）が積み重ねられてきた。

自律的なガバナンスで世界水準の成果を出すモデルとしては、二〇一二年開学のOIST（沖縄科学技術大学院大学）がしばしば引き合いに出される。英語を公用語とし、教員・学生の半数以上が外国人、理事会主導の運営。小規模ながらトップ被引用論文の比率は国内最高水準にある。国際卓越研

究大学は、こうした二〇年の蓄積の延長線上にある。

経緯 —— 公募から認定へ

制度は二〇二二年末に公募が始まった。初回は十校が申請し、東京大学・京都大学・東北大学の三校に候補が絞られ、二〇二四年十一月、文科大臣が東北大学を日本初の国際卓越研究大学に認定（第一号）。二〇二六年には東京科学大学が第二号として認定され、同年四月に体制強化計画を開始した。そして二〇二六年七月、京都大学が認定・認可の水準を満たし得ると公表され、事実上の第三号として正式認定へ向かうこととなった。東京大学は、なお審査が続いている。

■ これまでの経緯（公募～第2期審査）

時期	出来事
2022年12月	国際卓越研究大学の公募開始（初回・10校が申請）
2023年9月	東北大学を認定候補に選定（東大・京大・東北大の3校から）
2024年11月	文科大臣が東北大学を認定（日本初・第1号）
2024年12月	東北大学の体制強化計画を認可（初年度助成 約154億円想定）／第2期公募を開始
2026年（第2期）	東京科学大学を第2号として認定。2026年4月から体制強化計画を開始（初年度は厳格なモニタリング付き）
2026年7月	京都大学が認定・認可の水準を満たし得ると公表（正式認定へ。事実上の第3号）。東京大学は審査を継続

出典：文部科学省・東北大学・京都大学の公表資料より作成。本表は本紙発行時点（2026年7月）で公表されている最新の審査状況である。

◆ 補助線 —— 「体制強化計画」とは

認定校が国と結ぶ、最長25年の変革のロードマップ。研究力向上の道筋、事業・財務戦略、ガバナンス改革を盛り込み、数年ごとのマイルストーン評価で進捗が問われる。計画どおりに「変わり続ける」ことが、支援継続の条件になる。実績よりも将来の変革を重んじる制度設計が、ここに端的に表れている。

コラム 世界大学ランキングの起源

大学を世界規模で一列に並べるランキングは、実は21世紀の産物である。最初の本格的な世界ランキングが登場したのは2003年。それ以前、「世界で何位」という目差は一般的ではなかった。順位は自然の秩序ではなく、比較的新しい「発明」だといえる。

SEIKO INSTITUTE 世界大学 最新動向

【人類史】5万余年前のネアンデルタール人、複数のゲノムを解読（査読付き研究）

低品質のデータからでも、集団内の遺伝的多様性が読み取れるようになってきた（2026年7月）。探究のタネ：古い骨や堆積物から、どこまで過去を読めるのか。（出典：査読付き学術誌 Nature Communications）

告知

Scholars Guild 学術フェロー 登録制度

社会と学術を再接続する
知の共同体

定年は、学術人生の終わりではありません。

近年「大学の外で活躍する独立研究者・教育指導者（Independent Scholar）」という考え方が広がっており、大学という組織を離れても研究・教育活動を継続する流れが世界的に存在します。大学を離れた後も、皆さまの知見は社会に必要とされています。

Scholars Guild は、大学教員・研究者・教育者の専門知と経験を、次世代の育成、地域社会、教育機関、産業界へとつなぐための「知の共同体」です。教育・研究・社会貢献を通じて、新たな学術人生を共に創りませんか。

詳細・ご登録： <https://scholarsguild.jp/fellow/> / お問い合わせ：清光学院（大阪本校で受付） TEL 06-6948-6574 info@seiko-lab.com 受付：水～日 10:00-18:30



詳細・ご登録

推進の論理と、拭えない懸念

——「世界最高水準」の代償は、どこに現れるか

推進の論理

長期に安定した巨額の財源があってこそ、腰を据えた基礎研究と若手育成、国際的な頭脳循環が可能になる。短期・細切れの競争的資金では届かない「世界最高水準」に、集中投資で挑む。数校に絞るのは、限られた原資を薄く配らないための合理である——推進側はそう説く。

拭えない懸念

巨額の助成は、その多くが借入で支えられ、運用が振るわなければ償還負担が残る。25年の固定支援は、途中で誤りを正しにくい。数校への集中は、他大学や地方大学、基盤的経費の細りと表裏でもある——慎重論はそう憂う。

財務という土台の危うさ

ファンドの元本は、その多くが返済義務のある借入（財政投融资）で構成されるとされる。運用益が目標に届かない年が続けば、助成の原資は細り、将来の償還が重くのしかかる。25年という長期の固定支援は、安定の裏返しとして、制度そのものを途中で修正しにくくする。うまくいけば強力だが、外れたときの立て直しが難しい設計だ、という指摘がある。

ガバナンスと自律

認定校には、学外者を含む合議体（運営方針会議など）が中期的な方針に関与する仕組みが求められる。経営の規律と説明責任を高めるねらいだが、教授会に根ざしてきた大学の自律との間に、緊張が生じうる。OISTのような理事会主導の統治は、ゼロから設計した小規模大学だからこそ機能した面があり、歴史ある総合大学にそのまま移せるのか、という問いは残る。

「測れる成果」への傾斜

制度は「変革」への意思とコミットメントを重んじ、進捗はマイルストーンで評価される。だが評価が、外部資金の伸びや論文の被引用数といった「数えられるもの」に偏れば、数えにくいもの——基礎研究の多様性、人文・社会科学の射程、失敗を許容する時間——は、声高な否定ではなく、静かな縮小にさらされる。慎重論が最も憂うのは、この「測れるものだけが残る」力学である。

測れるものは、すべて正確に数え上げられる。問われるのは、測れないものを、どれだけ手元に残せるかである。

この一枚で押さえる三点

1. 制度は少数大学への長期・巨額の集中投資である。
2. 推進側は「世界最高水準」への合理を、慎重側は財務・自律・評価の偏りを説く。
3. 対立は「善か悪か」ではなく、設計の重心をどこに置くかの問題である。

用語ミニ辞典

大学ファンド／国が創設した10兆円規模の基金。運用益を助成の原資とする。

体制強化計画／認定校が国と結ぶ最長25年の変革計画。

アドバイザリーボード／認定を審査する文科省の有識者会議。

運営方針会議／学外者を含み中期方針に関与する合議体。

トップ被引用論文／被引用数が上位に入る論文。研究力の代表指標の一つ。

◆ 補助線 —— 「選択と集中」とは

限られた資源を、成果の見込める少数に重点配分する政策の考え方。効率は上がるが、裾野（多様な大学・分野・人材の層）が痩せる危険と背中合わせになる。どこまで集中し、どこから広く支えるか——そのさじ加減が、政策の質を決める。

コラム フィールズ賞の「40歳の壁」

「数学のノーベル賞」とも呼ばれるフィールズ賞には、受賞は原則40歳以下という珍しい年齢制限がある。円熟した業績より、若い才能の飛躍を後押しする——その設計思想が、この一風変わったルールに表れている。

SEIKO INSTITUTE 世界大学 最新動向

【惑星】謎の「赤い点」の正体は、生まれつつある赤ちゃん惑星だった（アリゾナ大学）

若い星のまわりで惑星が形づくられる、太陽系の初期に似た姿をのぞく窓となる発見（2026年）。探究のタネ：惑星は「どうやって」生まれるのか。（出典：アリゾナ大学）

誰にとっての「卓越」か

—— 学術・教育・運営・学生・社会から見る

◆ 五つの立場から読む

学術側。長期の安定財源は魅力だが、申請書やKPIに適合的な振る舞いが強まれば、自由な探究や失敗の余地が狭まる恐れがある。誰が「卓越」を定義するのかが問われる。

教育側。学部・大学院教育の質は、研究偏重の指標の陰で見えにくくなりがち。研究大学の看板と、教育の充実をどう両立させるかが課題になる。

大学運営（法人）側。経営規律とガバナンス改革は、財務基盤の強化と説明責任に資する。一方で、外部合議体と学内自治のバランス設計を誤れ

ば、現場の納得を欠く。

学生側。世界水準の研究環境・国際性・若手支援の恩恵が期待される。ただし恩恵が一部の分野・大学に偏れば、多くの学生には遠い話にもなりうる。

社会側。成功すれば、イノベーションと国際競争力に資する。だが巨額の公費を数校に投じる以上、成果の説明責任と、他大学・地域への波及の設計が問われる。

◆ 展望 —— これは、日本の研究をめぐる「賭け」である

国際卓越研究大学の強みは、長期に安定した巨額の財源にある。問われるのは、その強みを、大学の自律を瘦せさせず、測れないものを守りながら活かせるかどうかだ。制度の成否は、数えられる指標だけでなく、数えにくい多様性と自由をどれだけ手元に残せるにかかっている。第一号の東北大学、そして続く各校の歩みは、その壮大な実験の最初の観測点である。数字が語るのは、物語の半分にすぎない。

一段深く知りたい方へ

本号の分析の全体像——選定基準の設計、諸外国（ドイツ・英国）の集中投資の教訓、人文・社会科学を含む「研究力の測り方」まで——は、当研究所の白書および続くブリーフで順次扱います。本稿はその導入にあたります。

本稿は、特定の大学や政策への賛否を促すものではありません。また、学校・塾の先生方のご指導に代わるものでもありません。大学入試や進路の土台にある「大学のかたち」を、迎え入れる側の視点から整理し、生徒と語る手がかりを一段添えるものです。役割が違うだけで、優劣ではありません。

コラム 「Ph.D.」の Philosophy とは

理系でも文系でも、研究の最高学位は Ph.D. (Doctor of Philosophy) と呼ばれる。この philosophy は、現代の「哲学」という一分野ではなく、古い意味での「学問全般＝知を愛すること」を指す。分野を超えて「知を愛する者」に贈られる称号なのである。

SEIKO INSTITUTE 世界大学 最新動向

【AI×地球】AIが、これまで見えなかった無数の小さな地震を検出（スタンフォード大学）

イタリアの火山地帯で、ほぼリアルタイムに膨大な微小地震を捉え、地下の変化の理解に役立てる（2026年）。探究のタネ：「見る道具」が変わると、世界の解像度が上がる。（出典：スタンフォード大学）

書誌情報

知の現場（ブリーフ） 清光教育総合研究所 No.001 （2026年7月17日 発行）

発行：株式会社清光教育総合研究所（SEIKO Institute） 発行人：横尾清志 / 担当：教育研究部 教育の質的評価 調査研究

所在地：〒540-0008 大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル4F（本社） / 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-4-1 東方学会本館（東京分室） / seikoinstitute.org

推奨引用形式：清光教育総合研究所（2026）『国際卓越研究大学とは何か —— 10兆円ファンドが描く「世界最高水準」と、その代償』知の現場 創刊号

主要参照資料：文部科学省「国際卓越研究大学制度の概要」「東北大学の国際卓越研究大学研究等体制強化計画の認可等について」／内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 資料／東北大学・京都大学・OIST 公表資料（2022～2026）

免責：本稿の分析・見解は発行者によるものであり、引用した資料の作成機関の見解を示すものではありません。

清光教育総合研究所

SEIKO INSTITUTE